

ソロヴィヨフとベルジャーエフ：「新たな宗教意識」の系譜

青山, 太郎
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/4276>

出版情報：言語文化論究. 3, pp.1-19, 1992-01-31. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

ソロヴィヨフとベルジャーエフ

——「新たな宗教意識」の系譜——

青山 太郎

ベルジャーエフはその著書『ロシア的理念』(1971年刊)でソロヴィヨフについて、「彼はドストエフスキー同様、歴史的キリスト教の限界を越えた。ここにソロヴィヨフの宗教的意義がある」(p. 180)と言っている。ベルジャーエフも亦20世紀初頭、「新たな宗教意識」という歴史的キリスト教批判の運動の中からその思想活動を開始した。もっともソロヴィヨフはベルジャーエフにとってドストエフスキーほどに近い存在ではなかったらしく、このことは上記『ロシア的理念』などからも明かだが、その理由は主として、ソロヴィヨフには全一なるもの・絶対的なものの神秘的直観、つまりコスモスへの直観があったが、個の感覚、個の自由の感覚がなく、したがって悪の問題が抜け落ちていることであっらしい。初期の論文でも、例えば、「ソロヴィヨフは教父たちの信仰を正当化することのみをめざしており、あまりに多くの点で保守主義者であり、新たな思潮を恐れ、幾つかの恐るべき不可避のテーマを避けて通り、多くの問題で妥協的・常識的見解を持した」(Sub specie aeternitatis p. 345)とし、メレシコフスキーはソロヴィヨフよりも遙かに大胆でラジカルであるなどと言っている。これは1905年、ベルジャーエフが「新たな宗教意識」の運動に最も傾倒していた頃のことである。

とはいえベルジャーエフの著作、とりわけ初期の著作を読めば、彼がソロヴィヨフにすこぶる多くを負っていることは明かである。抽象的原理 *отвлеченные начала*、神と合

体せる人類 *богочеловечество*、神権政体 *теократия* 等の根本理念を彼はソロヴィヨフから汲んでおり、その他多くの哲学的・宗教的理念をソロヴィヨフと共有している。このことはなにもベルジャーエフのみにはとどまらない。わたしはベルジャーエフをはじめソロヴィヨフの次の世代に属するロシアの思想家たちの著作を最初に噛り、それから遡って少しづつソロヴィヨフを読みだした者だが、するとそれまで斬新に思っていた20世紀初頭の思想家たちが、しばしばソロヴィヨフの播いた種を拾っている鳥に見えてきて当惑した。これら若い世代の思想家たちは、その後いずれも独自の道を歩んで一家をなしており、わたしは彼らを貶めるつもりは毛頭ないが、少なくとも「新たな宗教意識」の運動を推し進めたメレシコフスキーやベルジャーエフの場合、彼らがソロヴィヨフに負うところは決定的に大きい。ベルジャーエフの思想活動の出発点となったこの運動の理念は、既にソロヴィヨフの内であった。

*

1981年10月、ソロヴィヨフはモスクワ心理学協会で『中世的世界観の凋落』と題する講演を行った(全集第6巻所収)。猛烈なスキャンダルを巻き起したこの講演は、彼の思想活動の上でも80年代から90年代への転換点に位置する。すなわち80年代、ソロヴィヨフは東西教会の統一による「自由な神権政体」の実現を唱えたが、その際彼は、西のローマ教会

が東の正教会よりもその社会性において優れていることを認め、教会統一はローマ教会の主導の下になさるべきことを主張し、スラヴ主義者たちの憤激を買った。この頃のカトリシズムに対するソロヴィヨフの共感、というよりロシア正教会への反感は、1888年5月彼がパリの或るサロンで行った講演『ロシア的理念』（全集第11巻所収）によく現われている。ここで彼がロシア正教会の反社会性に向ける弾劾は、チャダーエフも顔負けの激しさである。

東西の教会を統一し、さらに教会と俗世の権力をも統一して地上に神の国を招来するという、80年代のソロヴィヨフの夢は成らなかったが、ここから結果した両教会への幻滅は、彼の神権政体の理想をますます純化させたかに見える。1891年の時期、彼には東西教会の違いなどはもうどうでもよくなり、西も東もおしなべて、およそ歴史的教会キリスト教そのものがひとつの錯誤にすぎない、つまり本来のキリスト教の偽造物にすぎないと思われてくる。これはソロヴィヨフが当初から護持していた普遍的教会の理念の、当然の帰結でもあったろう。ソロヴィヨフ自身は自分が正教徒でもカトリック教徒でもなく、一キリスト教徒としてキリストの普遍的教会に属しているのだと考えていたが、このことは同時代の正教徒たち・カトリック教徒たちの理解を超えていたのである。

ソロヴィヨフが歴史的教会キリスト教をキリスト教の偽造物であると見たのはなぜか、これを明かにするには、たとえ簡単になりと、彼がキリスト教の本質をどのように考えていたか見ておかねばなるまい。幸い同じ1891年、彼は『偽造について』（全集第6巻所収）と題する小論を書いており、ここで自らの所信を端的に述べている。

ソロヴィヨフによれば、キリスト教の本質は、トルストイの説くような禁欲的隣人愛の内にあっても、教会キリスト教の言うよう

な教義や機密や神品組織にあるのでもない。これらはキリスト教の一部であって全体ではなく、これら部分を全体のごとく言うのはキリスト教を偽造することである。ソロヴィヨフはキリスト教の本質を、神の国についての福音に見る。そしてこの神の国とは、「神的なものが、神人たるキリストを通じて、自然的・人間的なものの中に完全に実現すること」であり、言い換えれば、「自然的人間の生の完き充実が、キリストを通じて、神性の完き充実と結びついたもの」である。つまり神の国とは、神性と人間性の完き結合にほかならないが、この結合は双務的性格を有しており、その実現には、神の側からする人間への働きかけと同時に、人間の側からする神への働きかけが不可欠である。すなわち、この結合の可能性は人間の内に与えられているが（「神の国は汝等の内にあり」）、これを現実化しようとする人間の努力なくしては、この可能性は可能性のままに終わってしまう。神の国は、永遠の神的理念としては「完全なもの」であると同時に、人間にとっては「完全になりゆくもの」であり、さらには「完全になしゆくもの」であって、その意味でこれは人間の仕事、人間活動の課題である。

この仕事は、孤立した個々人の仕事にはとどまりえない。人間は社会的存在であり、彼の至高の仕事は人類の社会生活に関わらざるをえず、世界史において人類が神と結合しゆく過程へと入りこまざるをえない。神の国の有機的成長は、個々人の主観的精神世界の内にとどまることなく、客観的歴史過程として世界史の内に発展をとげてゆく。つまり神の国の到来は、人類が全世界的な歴史過程の内に神と結びついてゆくことにより果たされるのであり、この過程において神は人間と結びついてのみ、また人間を通してのみ行動する。言い換えれば、キリスト教の本質は、神の事業が完き人間的事業となることに存するのであり、この神と人類の連帯こそが神の国

である。神と合体せる人類、ないしは神と合体しゆく人類の理念が、ソロヴィヨフのキリスト教的宗教哲学の根本であることは、多くの評者の一致して指摘するところであるが、この理念のしからしむるところにより、ソロヴィヨフは、キリスト教が政治に無関係であるとする俗見、また、キリスト教が歴史の進歩発展を否定するとする俗見を反駁する。

神の国の理念は、人類がキリスト教的理念を社会生活に持ち込むことを義務づけるのであり、人類は神の国をめざすその歴史過程の中で、自らの社会的・政治的諸関係をキリスト教的原理と調和させねばならない。つまりキリスト教的政治を実現せねばならない。神の国は天上ばかりではなく、地上にも実現せねばならないのである。

また、発展と進歩の理念を無神論や反キリスト教的思想と結びつけるのは誤りであって、この理念はすぐれてキリスト教的なもの（より正確にはユダヤ的＝キリスト教的なもの）である。これはイスラエルの預言者たちと福音の布教者たちにより人々の意識に持ち込まれたもので、異教（仏教とギリシア哲学）は絶対的完成を例外なく歴史過程の外に置いた。「人類の生の内に漸次開示されてゆく神の国というキリスト教的理念のみが、歴史に意味を与え、進歩の真の概念を規定する。キリスト教は人類に絶対的完成の理想のみならず、この理想達成の道をも与える。したがってそれは本質的に進歩的であり、キリスト教の内にこの進歩的要素を否定するあらゆる見解は偽造であり、キリスト教の名の下に異教的反動を隠している」(p. 336)。(ここには明らかに、ベルジャーエフの著書『歴史の意味』(1923年刊)の種子が播かれている。)

以上のようなキリスト教の理念に基づいて、ソロヴィヨフは講演『中世的世界観の凋落』において歴史的キリスト教を弾劾する。彼が中世的世界観と呼ぶものは、キリスト教と異教の歴史的に形成されてきた妥協のこと

であり、この妥協は、ローマ＝ゲルマン的西欧においても、ビザンチンの東方においても中世に支配的となり、そのまま現代に至っているものである。こんにちこの中世的世界観、すなわち歴史的キリスト教は、救い難く人間生活から乖離し無力化しているというのがソロヴィヨフの認識だが、その原因は、ソロヴィヨフによれば、キリスト教そのものにあるのではなく、中世的世界観によるその歪曲にある。そして彼はこの歪曲を、偏狭な教条主義、一面的な個人主義、虚偽の精神主義の三点により特徴づける。

この世の神の国への変貌こそが人類の課題であるが、この課題は歴史過程の上で、もちろん一挙に実現するものではない。キリスト教が非合法であったコンスタンチヌス帝の時代には、この世の終末が近いという意識と、いつ殉教に遇うか分らぬという意識がキリスト教徒たちを一定の精神的高みに保ち、異教的唯物主義が支配的となるのを防いでいた。新宗教に属することは、得をするよりは遙かに危険を冒すことであり、これに加わるのは、真摯な信念を有する最良の人々であった。迫害の終熄と新宗教の公認、次いで国教化は、事態を明らかに悪化させた。すなわち、異教の大衆が、信念からではなく模倣と打算から、キリスト教に加わるようになった。迫害時代には異教世界の内に、生のよりよい原理によって律されたキリスト教社会が、不完全なものではあれ存在したが、今やこの社会は、名目だけキリスト教的で実際は異教的な群集の内に没し、失われてしまった。「圧倒的多数の皮相で無関心な擬似キリスト教徒は、キリスト教の名の下に生の異教的原理を事実上保存したばかりか、本能的にあるいは意識的に、キリスト教と並んで、古い異教的秩序を法制化し永遠化しようとした。この秩序をキリストの精神によって内的に革新するという課題を締め出した。キリスト教と異教による妥協の最初の基礎はここに置かれた」(p.

385)。新たな回心者たちの大部分は、この世に由来せぬという神の国が文字どおり世界の外に留り、世界にはいかなる影響も及ぼさず、世界のどうでもよい飾りとなることを欲した。この世の異教的生をあるがままに保存し、ただこれに外部からキリスト教の油を塗ろうというのである。

ソロヴィヨフによれば、イスラム教はキリスト教に比べ内容的に遙かに貧しいが、しかしこの教えはイスラム世界の生の内に完全に実現されている。イスラム教が説く神の概念はすこぶる一面的なものであるが、この概念はイスラムの体制全体を規定している。いっぽうキリスト教はイスラム教と違い、完き真理を擁する宗教であるにもかかわらず、この真理は完きかたちでは実現されていない（これは世の終りまで不可能なことである）ばかりか、これの実現という課題そのものがキリスト教徒たちによって否定されている。彼らはこれが実現可能であるとは信じていないのである。キリスト教の意味は、信仰の真理によって人類の生を変容させることにあるのだが、彼らは行為によって、この信仰を正当化しようとしなかつた。その結果キリスト教の真理は現実の規範としての意味を失い、抽象的理論へ、義務的なドグマへと化した。すなわち、唯一の教会が存在し、民衆はこの精神的権威に服従すべしというドグマである。「いっぽう、キリスト教が救いの宗教であるという理念を捨てることはできなかった。かくしてこの救いの理念と教会的教条主義との秘かな結合から、救いの唯一の道はドグマへの信仰であり、これなくして救いは不可能であるという畸形的な教えが生い育った」(p. 338)。これがソロヴィヨフの言う、中世的世界観の排他的教条主義である。

とはいえ、この歪められたキリスト教の内にも、生きた信仰を死せる教条主義に見換えなかつた人々はいた。これら真のキリスト教徒たちは、なぜこの世界を救い生れ変らせよ

うとしなかつたのか。それは彼らが、救うことができるしまだ救わねばならないのは、社会や世界ではなく、個々人の魂だけであるという誤った考えに憑かれていたからである。キリスト教世界が異教的性格を帯びるようになって以来、社会性の理念は最良の人々の意識からさえも消え去った。彼らは自らの魂と他の多くの魂を救ったが、社会と世界には手を触れようとしなかつた。つまり個人の救いのみ専念し、公共生活の問題はこれを教会と俗世の権力に委ねた。しかるに、政府とは所詮社会の所産である。ローマ＝ゲルマン的ヨーロッパとビザンチンの東方が異教的性格の社会であった以上、それらの政府に民衆のキリスト教的指導を期待することはできない。

中世的世界観に固有のこの一面的世界観は、さらに一層重大な結果を招来した。「救いの対象を個人の生に限ったことで、擬似キリスト教的個人主義は、狭義の世界（社会、公共生活）のみならず広義の世界に、つまり一切の物質的自然に背を向けねばならなかつた。この一面的な精神主義において、中世的世界観はキリスト教の基底そのものと真向から対立するに至った。キリスト教は神の肉化と肉の復活の宗教であるが、人々はこれを、物質的自然を悪の原理として否定する一種の東方的二元論へと変貌させた。」(pp. 390-391)。

中世的世界観を虚偽の精神主義とするソロヴィヨフのこの指摘を敷衍したものが、メレンコフスキーの「新たな宗教意識」思想である。すなわち、メレンコフスキーにとって歴史的キリスト教は禁欲主義とほぼ同義であり、彼は、歴史的キリスト教には天上の真理、精神についての真理があるのみで、地上の真理、肉についての真理は未だ開示されておらず、キリスト教はこれを開示することによりはじめて十全な真理たりうるとした。キリスト教と異教の葛藤を描く長篇三部作（背教者

ユリアヌス、レオナルド・ダ・ヴィンチらを扱う)、評論『トルストイとドストエフスキー』等はいずれもこの問題意識に基づいており、ベルジャーエフにも多大の影響を与えたが、しかしのちにベルジャーエフは、禁欲主義を歴史的キリスト教の根本特徴とは必ずしも見做さなくなる。

こうして擬似キリスト教徒たちは、その反キリスト教的な教条主義・個人主義・精神主義によってキリストの精神を離れてしまったわけだが、それではキリストの精神はどこへ行ってしまったのか。キリストの精神は人類とその歴史を見棄てたのか。しかしそれならば、最近数世紀の社会的進歩は何に由来するのか。封建的農奴制の廃止、異端と異教徒への迫害の停止、拷問と残虐な刑罰の廃止等、これらの進歩がキリストの精神に沿うものであることは否定できないが、同時に、これらの進歩をなしとげた人々の大部分が、キリスト教徒を自認しない人々であることも事実である。ここからソロヴィヨフは、名目だけのキリスト教徒たちがキリストの精神を裏切ったいっぽう、この精神は今やキリストを信じない人々を通して歴史に働きかけているのだと考える。これは嘗てペリンスキーがゴーゴリとの論争の中で、キリストの精神はこんにちヴォルテールをはじめとする啓蒙主義者たちの内に生きていたと言ったのと、一脈相通ずる思想である。スラヴ派的な神権政体の思想から出発したソロヴィヨフは、ここにおいて西欧主義者・自由主義者たちに接近する。ソロヴィヨフには、徹底した19世紀の合理主義者・進歩主義者・オプチミストとしての一面があり、この合理主義と進歩主義は、彼が神の国を説くことにはささかも抵触しなかった。彼の思想活動のめざすところは、キリスト教の諸原理に対応する哲学体系を構築することであったが、このことは彼にとって、信仰により哲学を正当化することであるよりはむしろ、西欧哲学の到達点によって信仰を正

当化することであった。彼の宗教哲学は歴史的キリスト教と近代文化とが両立不可能であるという危機意識に発しており、それゆえこの宗教哲学そのものがひとつの「新たな宗教意識」であったにもかかわらず、のちにベルジャーエフから、ソロヴィヨフは未だ半ば古い宗教意識に属していると評されたゆえんである。

誤解のないように断っておくが、ソロヴィヨフは素朴な啓蒙主義者ペリンスキーなぞより遙かに複雑にして精緻であり、彼はもちろんこれら啓蒙主義者・実証主義者たちの限界を見極めたうえで彼らの事業を評価しているのである。そもそも彼は実証主義者たちを駁すことからその思想活動を始めたのだった。『中世的世界観の凋落』においても彼はこう言っている——最近の進歩の推進者であるこれら不信仰者たちは、虚偽の中世的世界観を突き崩すことによって、確かに真のキリスト教を益した。彼らの不信仰がキリストを傷つけることはありえなかったが、しかし彼らは、自らがその名において行動していた物質的自然そのものを傷つけずにはいなかった。自然の中に悪しき原理を見る虚偽のキリスト教的精神主義に、彼らが対置したものは、自然の内に死せる物質・魂なき機械のみを見るという、同程度に虚偽の観点だったからである。この二重の虚偽によって傷ついた地上の自然は、今や人類を養うことを拒否しつつある。信仰者と不信仰者は、この全般的危機を前に今こそ連帯せねばならない。互いに連帯することで母なる大地との連帯を回復し、大地を枯死から救うことで自らを死から救わねばならない。キリスト教徒はそのために先ず、キリスト教を生きた、社会的な、普遍的なものたらしめるべく努めねばならない。

*

1907年にベルジャーエフは、Sub specie

aeternitatis (永遠の相の下に)と『新たな宗教意識と社会性』なる二冊の著書を出版している。前者は1901年以來の評論を集めたもので、マルクス主義から出発したベルジャーエフが、カント流のイデアリズムを経てキリスト教的宗教哲学へと至る過程を如実に窺わせる点で興味深い。後者は書下しで、ここでベルジャーエフは、Sub specie aeternitatisをふまえた1907年の時点における自らの思想的到達点を語っており、彼の社会哲学の礎石はここに置かれる。その意図するところは、彼自身によれば、「社会性の問題を宗教の立場から提起すること」であるが、その際彼の立脚する「新たな宗教意識」がソロヴィヨフの問題提起に由来していることの証左として、次の一節を少し長いが引用しておく。

「キリスト教の歴史的運命の内には、何かしら奇妙にして謎めいたものがある。人間の生全体、社会性と文化、この世界の「肉」全体、全世界史が、言うなればキリスト教の外に、反キリスト教的なままに、つまり宗教によって聖化されぬままに取り残された。歴史の内なるキリスト教の勝利は、この世界に対するキリスト教の勝利であるよりはむしろ、この世界へのキリスト教の順応であり、キリスト教に対するこの世界の勝利であった。異教的国家、異教的家族、異教的科学と芸術は歴史の内に勝ち誇り、教会はあらゆる俗世の力と不自然なかたちで手を結んだが、その時消えゆく焚刑の火の中では、世界の文化と自由が焼き殺されていたのだった。歴史のキリスト教的な道、社会性と文化のキリスト教的な解決の道は、見出されなかった。キリスト教は個人的な宗教心としてのみ、個人的な救いの道としてのみ勝利し、それが純化された非妥協的形態のもとに創り上げたものは、禁欲的・修道的な聖性の理想、世界から孤立した聖性の理想であった。世界と結びついた聖性、世界史を、世界文化を是認する聖性、社会性を創造する聖性がいかなるものであるか

を、キリスト教は知らず、それへのいかなる道も指し示さない。〈……〉キリスト教は死と個人の救いについて多くのよきことを教えたが、生について、ここ地上の歴史の内なる世界の救済については、殆ど何らのよきことも教えなかった。本質的には、古い宗教意識は世界史の意味を否定し、全文化を手違いと認め、地上の肉の使命を理解しない。歴史的キリスト教にとっては、地そのものが何の役にも立たない誘惑である。世界の解放、世界の文化創造は悪であり、進歩であるよりは退歩である。古い宗教は、歴史過程の無目的性を認める点で実証主義と一致する。〈……〉歴史的キリスト教は汚名を雪がねばならない。われわれは大いなる問題に直面している。宗教的に死ぬばかりではなく、宗教的に生きるには、どうすべきか、天を地から引き離すのではなく、地と宗教的に融合するにはどうすべきか、という問題である。われわれにとって、古い不完全なかたちの宗教の再興はありえない。〈……〉われわれが宗教的再生を有しうるかどうかが、言い換えれば、われわれが事物の意味の意識を回復しうるかどうかが、挙げて、宗教が地上の運命へと向き直り、偉大な文化を意味づけ聖化しうるかどうかが、われわれを本来の義しい社会性の創造へと向けうるかどうかにかかっている。新たな、より完全な宗教意識は、世界史の意味と、世界の「肉」と、地への忠実さと、密接に結びついている。〈……〉祭日毎に教会へ行くだけの「キリスト教」、死せる儀式を執り行うだけの「キリスト教」、実生活の上では不信心と非人間性にすぎない「キリスト教」は、虚偽であり低劣である。歴史的キリスト教の失敗は、それが生の全ての側面を自らに従わせえなかったことに存する」(緒編 XLIV-XLV)。

ベルジャーエフは、ソロヴィヨフによる歴史的キリスト教の三つの特徴づけ(教条主義、個人主義、精神主義)をそのまま踏襲していると言える。もちろん、『新たな宗教意識

と社会性』にはベルジャーエフ独自の調子も響いており、彼はここで既にはっきり個の自由の問題、悪の問題に重点を置いている。これは彼がこの著書を、ドストエフスキーの『大審問官説話』の分析から始めていることと無関係ではないが、今はこのことは置いて、ここではソロヴィヨフが生涯をかけて追求し、ベルジャーエフがやはりその出発点において信奉していた地上における神の国の理念、すなわち神権政体の問題に触れておきたい。

神権政体などと言うと、現代人には浮世離れた時代遅れの神学談義ぐらいにしか思えないかもしれないが、実はこの問題は、20世紀における社会主義の問題と深い関わりを有している。ロシア革命を準備したのは、ある意味で、理念としての神権政体、つまり地上のユートピア思想である。これはロシア・インテリゲンチヤの心情を革命へと準備させるにあたり、大いに与って力があつた。その象徴的表現がブロークの長詩『十二』であつて、寒風吹きすさぶペトログラートの雪の街路を行進してゆく12人の赤衛兵たちは、血塗れの旗もち白い薔薇の冠をいただくイエス・キリストに先導されていたのだった。

ソロヴィヨフは学生時代、一時熱烈な社会主義者であつた。彼が無神論からキリスト教に転向してのちも、社会主義へのこの志向は、社会的主義の探求というかたちで晩年まで彼の内に生き続けた。彼の説く神権政体とは、彼の社会主義への志向がキリスト教の次元へ転移したものにはほかならない。彼の哲学思想が強度の社会性を帯び、キリスト教の社会的実践を常に強調するものであつたのは、このためである。ベルジャーエフの言う「共産主義の真実と嘘」の思想、つまり社会主義には真実の側面と虚偽の側面があり、社会主義の誤りを克服するには、社会主義の正しいところを認めてこれを実行せねばならない、そうすれば社会主義は少しもおそろしくない

という思想は、既にソロヴィヨフにある。彼が神権政体に求めたものは、ほかならぬ社会主義の真実であつた。しかしその最晩年、ソロヴィヨフは自らの神権政体の理想に幻滅し、地上に神の国の実現を待ち望むことは反キリストの誘惑であると考えに至り、『三つの会話』とその付録『反キリストの物語』を書いた。死の直前のことである。

ベルジャーエフも亦、神権政体の問題においてはソロヴィヨフとよく似た経過を辿つた。彼が『新たな宗教意識と社会性』において提起したのは、新たな宗教的社会性、つまり神権政体はいかにして可能かというものであつた。つまりキリスト教は個人だけを救えばよいというものではなく、人々の結びつきの問題、社会的調和の問題と取り組むことにより、歴史的かつ普遍的な救いの道を指し示すべきだというもので、これはソロヴィヨフ直系の「真実の社会主義」論にほかならなかつた。その際ベルジャーエフは、『大審問官説話』の内にこの問題解決の示唆を見て取り、社会性的問題を大審問官の誘惑に屈することなく解決することが、新たな宗教的社会性実現の道であると信じた。彼はキリストの教会が歴史的キリスト教へと変質した根本の原因を、この教会が大審問官の誘惑に屈したことに見ていたからである。しかし『大審問官説話』は元来が神権政体の欺瞞を暴露する性格のものであり、それゆえソロヴィヨフとドストエフスキーの神権政体論を併せ擁するベルジャーエフの立場は、その内的矛盾ゆえに永くは維持されえないものであつた。

1917年刊の『創造の意味』でベルジャーエフは、宗教的社会性を神権政体として地上に思い描くことの非を指摘し、来るべき新たな神の都は旧来の社会性的の諸要素からは創造されえないとしている。神の国は歴史の目的、歴史の終末であり、歴史の域外に出ることであるがゆえに、神の国は歴史の内にはありえないというのである。

さらに1923年刊の『不平等の哲学』においては、神の国をこの地上に探し求めることは宗教意識が抱く幻想のひとつであり、反キリストの誘惑であることが、明瞭に意識される。これはユダヤ的千年王国説のキリスト教版ないしマルクス主義版（社会主義）であって、十字架にかかったキリストを忘れ、ゴルゴタをキリストと分ち合うことを嫌い、贖いの奥義をとび越えて神の国に入ろうとすることである。ゴルゴタと贖いなしの地上の神の国を約束する者は反キリストであり、反キリストがキリストよりも人々を誘惑するのは、彼がキリストの実現しなかったことを実現すると約束するからである。現代における地上

の正義の探求者たちも亦、この誘惑に抗しえなかった。

つまりソロヴィヨフがその最晩年に見たと同じものをベルジャーエフも見るに至ったわけだが、それにもかかわらずベルジャーエフは生涯、社会主義と完全には訣別しなかった。これは彼の社会哲学のまた別の要因にその由来を探らねばならぬことであるが、いずれにせよ彼が「社会主義の嘘」とは訣別したものの、「社会主義の真実」と訣別しなかったことは、社会主義に対する彼の態度を最後まで曖昧にした。こんにちわれわれは既に、社会主義に二つはなく、所詮ひとつの社会主義があるだけだと考えるに至っている。

Soloviev et Berdiaev.

—Généalogie de la Nouvelle conscience religieuse—

AOYAMA Taro

Le fondement de la philosophie sociale berdiaevienne vient de l'idée théocratique de Soloviev.

Au début de sa carrière philosophique Berdiaev se situe dans le mouvement "Nouvelle conscience religieuse", dirigé par D. Merejkovsky. Sa philosophie sociale suit entièrement la critique solovievienne du christianisme historique.

Soloviev voyait l'origine de l'inefficacité sociale du christianisme dans la déformation de cette religion par la "vision moyenâgeuse du monde". Il caractérise cette "vision" par (1) dogmatisme étroit, (2) individualisme partial et (3) spiritualisme faux ("Sur la falsification" Œuvres complètes, vol. 6), et il vise à la théocratie qui n'est autre chose que le royaume de Dieu sur la terre.

Berdiaev réclame, lui aussi, la théocratie en tant que le christianisme efficace dans la vie sociale. Mais la théocratie berdiaevienne contient une contradiction insoluble : son idée théocratique se fonde sur la théocratie solovievienne d'une part, et sur la "Légende du Grand Inquisiteur" de Dostoevsky d'autre part. Or cette "Légende" tend plutôt à dévoiler la fausseté d'idées théocratiques en général. L'idée théocratique de Berdiaev était intenable à cause de cette contradiction.

Comme Soloviev dans sa dernière époque, Berdiaev rejette bientôt l'idée théocratique sur la terre. Mais il reste socialiste toute sa vie. Son attitude équivoque envers le socialisme vient du résidu de sa théocratie à la Soloviev.